

竹取物語

——日本最古の物語——

年 組 氏名

美しく成長したかぐや姫をめぐる五人の求婚者たち
竹取の翁と妻の姫に大切に育てられた「なよ竹のかぐや姫」は、三か月ほどで、またたくまに美しい女性に成長しました。その美しさは、本当に光り輝くほどでした。かぐや姫の評判は高くなり、多くの男性が求婚しました。なかでも五人の貴公子が特に熱心でしたので、姫は一人一人に要求を出し、かなえてくれたら結婚すると約束しましたが、それは、どれもとても難しい要求でした。五人の貴公子は、姫と結婚したために、あれやこれやと策略をめぐらしたり、苦勞したりして、この難題に挑戦しますが、……

①石作皇子と仏の石の鉢

石作皇子にかぐや姫が出した難題は、遠くインドの国まで行って、お釈迦様が持っていた鉢を持ち帰ってくるというものでした。

石作皇子は目先のきく人で、「天竺（インド）にも二つとない鉢を、たとえ百千里の距離を乗り切って出かけても、とって来られるはずがない。」と考えて、天竺には行かず、三年ほど待って、大和の国の山寺にある、まっ黒い墨のついた鉢を取ってきて、錦の袋に入れ、旅の苦勞をまことしやかに綴った歌をつけて、かぐや姫に差し出します。それを見たかぐや姫は、

おく露の光をだにぞ宿さまし

小倉山にて何もとめけん

もし真実の仏の石鉢なら、置いた露が反射するほどに光るはず。しかし、すこしも光らないではありませんか。あなたは、あの小暗い小倉山で、こっそり何をしていたのですか。

と、石作皇子のうそを見破ってしまいます。



②庫持皇子と蓬萊の玉の枝

庫持皇子に与えられた難題は、「東の海、蓬萊」にある「銀を根とし、金を茎として、白き玉を実として立てる木」を一枝持ち帰ってほしいというものでした。

庫持皇子は策略に秀でた人で、当時の有名な鍛冶職人たちを集めて、ひそかに全財産をかけて、三年がかりで、玉の枝を作らせたのです。やっとできあがった玉の枝を持ってかぐや姫のもとにやってきた庫持皇子は、得意気に架空の苦勞話をかぐや姫に披露します。皇子が話した蓬萊の山とはどんな所だったのでしょうか。

その山見るに、さらに登るべきやうなし。その山のそばひらをめぐれば、世の中になき花の木ども立てり。金・銀・瑠璃色の水、山より流れいでたり。それには、色々の玉の橋渡せり。そのあたりに、照輝く木ども立てり。

かぐや姫の昇天

こうして、五人の貴公子たちの難題に対する挑戦は、いずれも失敗に終わります。帝からの求婚さえも固く断ったかぐや姫は、翁に、自分が月の都の者で、八月十五日には迎えが来て、月の都に帰らなければならないことを話します。帝の兵二千人あまりで家を守り固め、姫を月に帰すまいとする翁の願いもむなし、姫は昇天してしまいます。

その山は、見ると、全く登る道がありません。その山の斜面を回っていくと、この世のものでない美しい花が咲いています。金色・銀色・瑠璃色の水が山から流れていて、さまざまな色をした宝玉で作った橋がかかっています。

ところが、皇子の苦心の作り話も、ほうびを請求する鍛冶職人たちが現れて、うそがばれてしまいます。世間の笑いものになることを恐れて、庫持皇子は行方をくらましてしまいます。

③阿部右大臣と火鼠の皮衣

かぐや姫に「唐（中国）にある火鼠の皮衣」を求められたのは、財産家の阿部右大臣でした。

右大臣は、唐船に乗って交易に来ていた王けいという人のもとに家臣を遣わして、火鼠の皮を買ってきてほしいとお金を託します。王けいは、天竺まで行って求めたという皮衣を右大臣に届けます。かぐや姫の「本物ならば火の中に入れても燃えないはず」という言葉を聞いて、右大臣が試しに燃やしてみると、美しい皮衣はめらめらと燃えてしまったのです。

④大伴大納言と竜の首の玉

大伴大納言に与えられた難題は、「竜の首に五色に光る玉」でした。

大納言は、家来たちに命令して、五色の玉を探しに行かせますが、家来たちは、みな怖がって、お金だけもらってかくれてしまいます。大納言は自ら船を仕立てて、玉探しに出かけますが、船は南海の孤島に漂着し、大納言も病気になるてしまいます。竜のたたりを恐れた大納言は、こんな難題を出したかぐや姫をあきらめます。

⑤石上中納言とつばめの子安貝

五人目の貴公子石上中納言に与えられた難題は、「つばめの持ちたる子安貝取りて賜へ」というものでした。中納言は、「子安貝はつばめが子を産む時にできるそうだ」と聞いて、つばめが巣を作るのを待ちます。かごに乗って自ら子安貝を探そうとした中納言は、家来たちが誤って綱を操作したため、落ちてしまいます。高いところから落ちたショックと子安貝を手に入れられなかった失敗を悔やんだ中納言は、病の床に伏せり、そのまま死んでしまいます。